古書はいつもあたらしい

interview インタビュー

古書をひもとく「尺度」をみがく

～当館所蔵の古書2300冊から～

立教大学名誉教授・理学博士 溝尾良隆 みぞお・よしたか●立教大学名誉教授。理学博士。公益財団法人日本交通公社評議員。群馬県出身。東京教育大学理学部地理学専攻卒業。1964年株式会社日本交通公社外人旅行部に入社、1969年財団法人日本交通公社へ移籍。1989年立教大学社会学部観光学科教授。観光学部教授、観光学部長、日本観光研究学会会長を歴任。

聞き手
「旅の図書館」館長○福永香織
副館長○大隅一志

編集協力○井上理江
写真○村岡栄治

古書2300冊を概観して感じたこと、旅の図書館所蔵の古書の特徴

事務局…当館では、主に戦前の本を古書と定義していますが、（私が担当になった）2014年頃は古書・稀覯書としてまとまっていたものが3600冊くらいありました。1970～80年代といった比較的近年出版された本や、他の図書館から寄贈された貴重本も含まれていたので、再分類して2300冊に絞り込みました。

一方で、当館にある古書の特性や収集状況などを十分に把握できておらず、最低限の書誌データがあるだけだったのですが、旅行案内書を研究していらっしゃる関西学院大学の荒山正彦先生をはじめ、全国から研究者の方々にお越しいただくようになり、当館にある古書の価値を色々と教えていただきました。

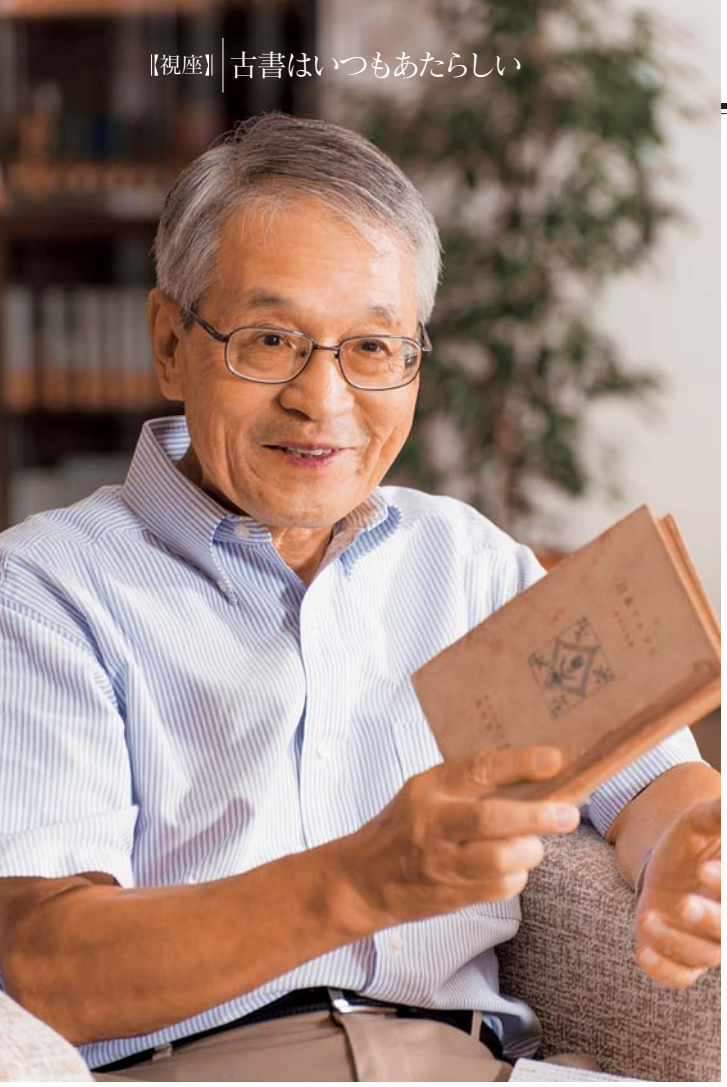
こうした中で、「昨年度から「所蔵古書の概要把握と保存・活用に関する研究」を開始しました。溝尾先生には古書の特性についてアドバイスをお願いしましたが、まさか2300冊全てを見ていただけるとは思っていませんでした。

溝尾…こういった本は大事だという意識が強かったのですが、見ていくと非常に良い本があり、素晴らしいと思いました。これは全て見なくてはいけない、もっと良い本があるのではないかという気になってしまい、結局全部確認してしまいました。1冊ずつ重要度を星印で三ツ星から一ツ星、除籍してもよいものにXをつけ、コメントを入れています。あくまでも私の主観なので、皆さんにもう一度よく見ていただきたいと思います。三ツ星のものはぜひ読んで欲しいですし、除籍についても検討していただきたい。

福永…全体をご覧いただいたからこそわかる、当館の古書の特徴はありますか。

また、改めてお感じになられたことはありましたか。

溝尾…特に旅行案内書や観光政策関連の古書は充実していると思います。この部分で抜けているものがあれば買い足していってもいいかもしれませんね。戦前は鉄道省国際観光局とジャパン・ツーリスト・ビューローが日本の観光



を牽引していたのが刊行された本をみればよくわかります。観光史を調べる上で、国際観光局が昭和5年にできてから何をやってきたかに私はすごく興味を持っていますが、同局は『**ツーリスト移動論**』（オギルヴィエ、国際観光局、1934年）『**観光経済学講義**』（アンヂェロマリオッテイ、国際観光局、1934年）といったように海外の古典的名著ともいえる観光関連の本を数冊翻訳しています。私が気になるのはイタリア語やドイツ語のどういう言葉を観光と訳したのかです。国際観光局が翻訳した『**観光学概論**』（アルトゥル・ボールマン、1930年）には（本書における「観光」はFremdenverkehrの訳語である。この語の本来の意味は「外来者交通」であって、「観光往来」或は「観光事業」に当たる場合があるのであるが、本書では一貫して「観光」の訳語を用いた。）という注がありましたが、そういうのが一番ありがたいです。

また、こうした中には復刻版が出されているものもありますが、本当に忠実に復刻しているのかという問題があります。

例えば、『**特命全権大使米歐回覧実記**』（久米邦武・編、1878年）は、観光の本ではないですが、巻頭に「観」と「光」を1文字ずつ2ページに分けて記しています。しかし、復刻版ではこれを1ページにまとめてしまっています。大きな問題ではないかもしれませんが、意味合いが違ってきますよね。研究者はすべて復刻版に頼るのではなく、本当はオリジナルを見た方がいいと思います。いずれにしても「観光」を冒頭に大きく掲げたのは、「（先進国を）見て回る（学ぶ）」の決意があったのでしょう。今日的な意味がすでに知れ渡っていたのでしょうか。「観光」をなぜ取り上げたかの話があると面白いのですが。

有名なウエストンの『**日本アルプス**』（岡村精一訳・1953年）という本がありますが、私がこの本で一番好きなのが「日本アルプスは、氷河に覆われた峰の光輝を見せてはいない。それは事実である。又その規模は有名なスイス・アルプスに較べるとほんの三分の二ではある。けれどもその谷間の画のような美しさ、壮大な山腹を覆う鬱蒼として静寂な森の壮麗さは、私のヨーロッパ・アルプス放浪中に見たどれよりも美しいものである。」（原文ママ）という一節です。これを書いてくれたおかげでヨーロッパ人が日本アルプスに興味を持つことになりました。

日本の山は山頂を征服するのではなく、頂上に行くまでの景色を楽しんだりすることが大事で、頂上はその結果だと。そうすると原書の英語版では何と書かれているのかが気になります。旅の図書館は英語版の*MOUNTAINEERING AND EXPLORATION IN THE JAPANESE ALPS.*（1896年）も持っているので、この一節の日本語版と英語版を比較して見ると良いのではないでしょうか。

このように、時代を追うごとに内容が変わってしまうこともあるので、オ

リジナルの本をしっかり残しておくことは大事だと思いますね。

あと、古書が大事だと思ったのは、昭和48年に日本交通公社出版事業局が『**新日本ガイド**』という本を出していましたが、例えば神戸をみると、初版では近畿編全350ページのうち神戸が紹介されているのは4ページでした。ところが最終版では12ページに増えていて、神戸のウェイトが高まったことがわかります。

また、四万十川は観光地ではなかったので、初版本ではまったく紹介されていませんでしたが、最終版では囲みで半ページ紹介されています。このように、新しいガイドブックと古いガイドブックの比較をすると観光地の変遷を知ることができます。

『日本地理風俗体系　中部および北陸地方』（昭和34年）に日本アルプスという項目があり、全415ページのうち225ページに渡って紹介されています。また、昭和6年に発行された『日本地理体系』のシリーズでは別冊が丸1冊（B5版・271p）、富士山を扱っています。昔は重点を置くものには本当に力を入れるんだなと感心します。富士山自体はあまり変わって

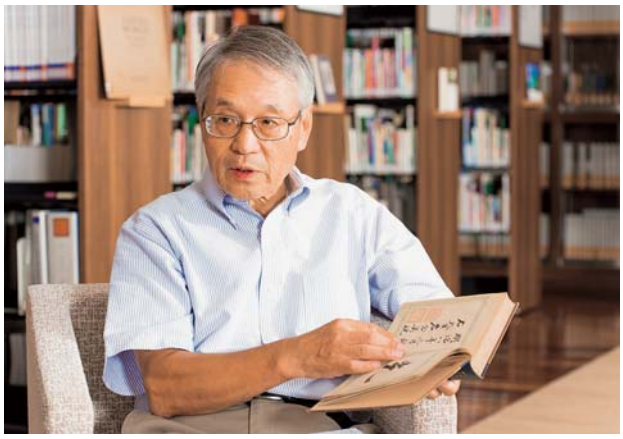
『**観光学概論**』
アルトゥル・ボールマン、日本交通公社、1930年

『**ツーリスト移動論**』
オギルヴィエ、鉄道省国際観光局、1934年

『**国立公園案内　附　旅程とその費用**』
国立公園協会、1933年

『**日本アルプス**』
ウエストン著、岡村精一訳、創元社、1953年

『**観光経済学講義**』
アンヂェロマリオッティイ、国際観光局、1934年



いないので、富士山を研究するなら、こういった本を見る必要があるでしょうね。一方で、最近は食べるものと遊ぶことに関する本が多いですよね。悪くはないですが、それしかないというのは問題だと思います。

それから国立公園についても、昭和9年に選定されたところだけを日本最初の国立公園としている記事をよく見かけますが、そうではなくて、国立公園協会は、1933（昭和8）年3月に『**国立公園案内 附 旅程とその費用**』を刊行し、12を候補でなく国立公園として選定したと報告しています。では

なぜ昭和9～12年とされているかというと、決定後に現地で境界を決める杭打ちに時間がかかっただけの話です。

また、水上温泉が栄えたのは、上越線と清水トンネルが開通したからです。古書をみると開通前は、わびしい様子でしたが、開通後は新潟からの新婚旅行の1泊目になったりして、栄えていったことがわかります。古い本があれば、上越線の開通前後での比較ができます。そういう意味で、古い本の利用方法というのはたくさんあると思います。

このように丁寧に読むと大事なことが見えてきて、やって良かったなと思います。古書というより、大事なのは原書であって、そういう本は大事に残しておかなければいけないでしょう。そしてたくさん本を読んでいると、自分の尺度が決まって来ます。

福永…一般的に、古書はなじみのない方も多いと思いますが、どのようにアプローチしていけばよいと思いますか。

溝尾…やはり自分の好きな分野から入るのがいいのではないでしょうか。山が好きなら志賀重昂の『**日本風景論**』を読むでしょうし、そこからウエストン、小島烏水、日本八景、国立公園へとつながってきます。

地域に関わる人が読むべき本、自分が感銘を受けた本

溝尾…最近の若い人は仕事でわからないことがあればネットで調べると思います。それが悪い訳ではありませんが、自分の「箱」が広がらないと思います。東北地方を例にとると、遠野の仕事をする時は『**遠野物語**』（柳田國男、1910年）は読むでしょうが、釜石の仕事をする時は、市長で素晴らしい仕事をした『反骨　鈴木東民の生涯』（鎌田慧、講談社文庫、1992年）の本まで目が行き届かないでしょう。その地域の仕事をするのであれば、その地域について書かれた本を読む必要があると思います。現地でヒアリングをする時もそういうことを知っているか否かで理解力や相手の反応が変わります。私はどこかで「旅と本」というテーマで連載したいと思っています。これまでに自分がどういう旅をして、どういう本を参考にしたのかを執筆するものです。

ちょっと変わった視点から、1980年半ば前後から日本各地に、ニコニコ共和国、アルコール共和国などミニ独立国が続々誕生します。最盛期には200を超えたと言います。それは井上ひさしさんが1981年の834頁の長編『吉里吉里人』（新潮社）を刊行したからです。岩手県大槌町吉里吉里が、日本国から独立するパロディーです。

大隅…図書館も新しい本ばかりに目をつけていてはだめで、過去のものであっても、記録として重要なものをきちんと残していかないといけませんね。

溝尾…たまたまこれも東北になりますが、地域のグランドデザインを描くときに、1968年に出版された『自分たちで生命を守った村』（菊地武雄・岩波新書）という本があります。これは長い間、医者がいない村であった貧しい岩手県沢内村で、深沢晟雄氏が村長になって高齢者の医療十割負担と乳児の死亡ゼロを目指した医療改革をおこなった話です。今の少子高齢化対策にあたりますが、村長や町長はこのくらいの気概を持ってほしいと思います。私のゼミ生にはだいたい読ませていますし、研究員にもこういう本を読んでもらいたいですね。

福永…もう少し色々な方が古書を手にとっていただけるようになるといいと思いますが、先生は授業で古書は使いますか。

溝尾…先ほど紹介したウエストンの一節を引用したり明治40年代に来日したキップリングの「日本は風景が多すぎる」というのも好きな言葉で、よく話します。

福永…海外との比較によって日本のオリジナリティに気づくことがありますし、当時のお雇い外国人が日本をどう見ていたかというのも紐解くと面白いですよね。

溝尾…それはありますね。他にも桂離宮が評価されるきっかけになったブルーノ・タウトの「桂離宮が真の日本的な建物で、東照宮は日本的ではない」（『日本の芸術』（春秋社、1950年））といった言葉などもしっかり残した方がいいと思います。

「旅の図書館」の今後のあり方

福永…最後に、当館の今後に向けた課題や役割についてどう思われますか。

溝尾…以前から伝えていますが、除籍のフローと除籍の基準を確立することが大切だと思います。なるべく良い本を残し、いまや不要、あるいは意外によくなかった本は除籍するべきです。また、かなり傷んでいる本もあるので、きれいに直して、公開の可否を検討すべきではないでしょうか。研究者には目録を提供するとか、そういった情報提供をしてあげてもいいかもしれません。

　また、スマートフォン、ネットの現代において、ここにある本についてどういう情報提供をしていくかでしょうね。情報収集手段がどんどん変わっていますから、提供する側も変わっていかなければいけないでしょうね。

大隅…確かにそうですね。一方で、本そのものを見られることもすごく大事かと思います。

溝尾…もちろん、それはすごく大事ですね。いい本を入れて、質の高い情報を提供するようにしなければなりません。難しいのは似たような本も多いなかで、どの本を通じて、何を提供するかですね。

大隅…観光文化231号で紹介した「一度は読みたい観光研究書&実務書100冊」でも新刊図書の評価はとても難しかったです。古書の定義についても今後10年、20年経った時に、いつまで、戦前、戦後をを境にしていていいのかと思うこともあります。

福永…図書館のあり方も昔とは変わってきています。ただ本を集めるだけでなく相手に合った情報をどう提供していくかが重要になると思います。例えば古書の読み方や、古書の中で現代に通じる視点などを紹介していくとか。一方で、蔵書については当館だけでは限界があるので、他の専門図書館などと連携していくことも大事かと思います。

　溝尾先生、本日は貴重なお話をありがとうございました。

参考文献

『新日本ガイド四国』日本交通公社出版事業局、1978年

『全訳 遠野物語』石井徹 訳注、無明舎出版、2012年

『観光学の基礎』観光学全集1、溝尾良隆編著、原書房、2009年